

エッセイ

中国旅客機の模型がもたらした国際交流

安井 眞奈美

二〇一五年八月、私は初めて中国に降り立った。山東省済南市で開催された第二二回国際歴史科学大会 (the 22nd International Congress of Historical Sciences “<http://www.ichschina2015.org/>”)に参加するためである。ヨーロッパを中心とした社会科学系の学会が集う歴史ある総合集会で、世界中から数多くの研究者が済南市に集まった。私が発表したのは中絶と嬰兒殺しの比較研究についてのパネルである。フランス、アメリカ合衆国、アフリカ諸地域、ポーランド、ルーマニア、日本を事例に、中絶と嬰兒殺しの歴史を説明し、それらに対する人々の意識がいかに変容したかを比較するもので、たいへん刺激的なディスカッションとなった。

二〇一五年当時は、中国から日本への観光客が急増していた時期で、関西空港から山東省行の中国の航空会社による直行便は、出国ぎりぎりまで「爆買い」をし、多くの手荷物を持った中国人でほぼ占められていた。

飛行機が山東省の空港に着陸した時、まだシートベルトを外すサインが出ていないにもかかわらず、多くの乗客が立ち上り、頭上のキャビネットを開け、荷物を取り出し始めた。一人の

男性が無理やり引っぱり出した小箱が上から落ちてきて、私の顔を直撃した。激痛が走り、その後、頬がジンジンと痛み出した。

私は思わず、「あんたの荷物が顔にあたって、痛いんやけど」と関西弁で言い放った。中国語はできないし、英語でどう言えばよいかもすぐにはわからない。海外の各地を訪れる中で私が学んだ教訓は、緊急事態はとりあえず母語でよいから、直ちに周りに知らせることであった。荷物の主は何も言わず、にやにやしながら降りて行った。私は痛みが強くなってきたので、キャビンアテンダントの女性に事情を説明して氷をもらい、頬を冷やした。

ベルトコンベヤーで荷物が出てくるのを皆が待っている間、大勢でこったがえす人ごみの中、私はあの男を探した。まるで「私立探偵」の気分である。私は昔から目がよく、人を探すのは得意だ。

それらしい人物を見つけたが、さすがに一人で声をかけるのは気が引けた。そこへタイミングよく、仕事を終えたキャビンアテンダントの女性たちが機内から楽しそうに出てきたので、氷をくれた女性に話しかけた。彼女は明らかにやそうな顔をしていたが構わず、一緒に男性のところまでついて来てもらった。それで「あなたの荷物があたって、顔が痛いです。謝ってください」と男性に英語で伝えたら、彼は日本語で「すいません」と言った。聞けば日本の企業に勤務しているという。日本語はよくわかるのだ。だったらなぜにやにや笑っていたのか。

私はかなりムツとして、「治療費は保険で請求する、しかし安全が確保されない航空会社には問題があるので、きちんと話したい。その際に問い合わせをするかもしれないので、名前と連絡先を教えてほしい」と言って、日本の企業名まで聞き出した。ここまで情報を得られた私は「私立探偵」としては上出来だろう。彼は「すいません」ともう一度言ってその場を去った。

キャビンアテンダントに、「安全管理について、会社のしかるべき部署に報告してほしい」と言ったら、自分でサービスマンに連絡して、と電話番号を渡された。

学会の開催されるホテルには、二四時間勤務の中国人ドクターがいたので無料で診てもらえた。「すぐに冷やしたのはよい判断だった。もうしばらく冷やしたら治ります」と言われて、ほっとした。ホテルの従業員の女の子たちが心配して、氷を届けてくれたり、キュウリの輪切りを持ってきて中国の民間療法を教えてくれたりした。キュウリを頬に貼って、航空会社に電話した。一部始終説明すると、明日、責任者が連絡します、と電話は切れた。

翌日、責任者という中国人の男性から電話があった。少し日本語が話せるようだった。彼は英語で、「欲しいのは金か、モノか」というような意味合いのことを切り出してきた。クレマーと思われたようだった。私はさすがに怒りを伝える必要があるだろうと思ひ、「機内の安全が確保されないから、今後、このような事故が起きないようにと電話をしたのに、その対応は失礼ではないか。金もモノも要らない、機内の安全を確保してほしい」と言ったら、やっと真意が伝わったようで、彼は「申し訳なかった。今すぐ謝りに行きたい」と言う。断ったが取り合ってくれなかった。

四〇分後、彼はホテルにやってきた。上司の女性二人となぜかガールフレンドまで連れてきた。私は、同じような事故が起きないように対策を考えてほしい、と再度言ったが、彼らは中国人の乗客にそんなことを言ってもしかなかったが、他の飛行機でも同じようなことが起きていくし、中国人はマナーを知らない、と言う。私は、他の国際線ではそんなことは起きていないし、中国人はマナーを知らないと思うなら、そのマナーをあなたの会社から作り出していけばよいではないか、と憤慨した。

彼らはようやく本気になって、どうすればよいかを教えてほしいと頼んできた。それから私たちは、ホテルの喫茶店で二時間半、機内の安全確保に向けての具体策を、ゆっくりとした英語にときおり日本語を織り交ぜて、延々と議論することになる。彼らが、途中から真剣に考え始めたことと、おそらく皆、三〇代〜四〇代前半くらいの年齢で、責任者にしては若くてやる気に満ちていたことに私の心が動いたからだ。男性はその日は休日で、ガールフレンドとのデートを返上してやってきたようだ。彼女もまじめに議論に参加しているのが微笑ましかった。

最後にぜひ済南市を案内したいという彼らの提案を、翌日からの学会を理由に丁重に断った。彼らは、心からのお詫びです、と今度は立派な箱詰めのお菓子とさらに大きな箱を差し出すではないか。これも断ったが、どうしても持ち帰ってほしいという。大きくて重い箱は、なんと航空会社の旅客機の大型模型であった。「社長室に飾ってあるものと同じ模型です。これだけ大きい模型は誰も持っていません。一番いいものです。どうかお持ち帰りください」と言う。私は、「帰りの飛行機でこの模型の箱が頭上のキャビネットから落ちてきて、また私の顔にあたらしたら洒落にならないので要らない」と断ったが、そんなことは絶対にない、と譲らない。熱意に押され、結局持ち帰ることとなった。

学会を無事に終え、同じ航空会社の飛行機で帰路についた。空港でチェックインを済ませたら、一番に案内された。タラップの階段を上って飛行機に乗り込もうとすると、なんとホテルに訪ねてきた男性が制服を着て颯爽と立っている。そしてにこやかに、「わたくしが責任をもって、関西空港まで安全にお送りいたします」と、一番よい席へ案内してくれた。そして、「この荷物はこちらでお預かりしますね」と、飛行機の模型を預かってくれた。さっそく安全を心掛けて仕事をする彼のパフォーマンスに感心した。聞けばこの飛行機に搭乗するため、シ

フトを代わってもらったのだという。

関西空港に到着し、「また機内でお会いしましょう」と彼はにこやかに挨拶した。中国の、若い力を感じた旅となった。

帰国後、巨大模型を飾ろうとしたが大きすぎて棚がない。箱に入れたまま二年ほど放置していた。

陽の目を見たのは国際日本文化研究センターに移ってからである。これまでの海外経験から国際交流について考えるイベントに、パネラーの一人として参加した。出がけに夫が、あの飛行機の模型を持って行って「国際交流」の話題をしたらと提案してくれた。あれも国際交流か……と感慨深く思い、雨の中、大きな荷物を持って会場へ向かった。イベントの最後にこのエピソードを披露して、模型を箱から取り出した。フロアから笑いが起きる中、誰かの熱い視線を感じた。高校生とおぼしき男の子がじっと私を見ている。飛行機の模型に魅了されていることは明らかだった。彼に「これ、ほしい？」とジェスチャーで伝えたら、ものすごい勢いで首を縦に振っている。イベントが終わった後、彼にプレゼントした。国際交流に興味を持ってイベントに参加していた彼は、将来パイロットになりたいという青年であった。

こうして中国の航空会社社長室にも飾られている稀有な旅客機の模型は、パイロットになる夢を持つ日本の青年のもとにめでたく届いた。

九月には国際日本文化研究センターの公務で北京に行き、日本語で講義をする。またどんな出会いが待っているのだろうか。次は、中国の新たな航空会社に挑戦することになる。

(国際日本文化研究センター教授)

(平成三〇年七月受領)